

紹介

広島大学寄託

加計閨屋文庫目録 第二巻

藤田五郎氏によって後進地帯における農奴主マニユフアクチュアと規定された、広島県山県郡加計町の加計家の膨大な文書・典籍群が、広島大学附属図書館に寄託され、多くの研究者による利用の道がひらかれたことはすでに周知のことである。このうち、鉄山閨係史料の目録が「加計閨屋文庫目録 第一巻」として刊行されたのは昭和三八年のことであった（本誌四七巻六号紹介）。隅屋鉄山業を中心とした近世鉄山史の研究は、その後もこの目録作成に携った武井博氏らを中心に着実に進められている。しかし、加計家は慶安以降、加計村庄屋となったほか、鉄山業の隆盛にともない山県郡年寄格・芸北三十二か村割庄屋・山県郡の社倉区取・紙楮支配役・川舟支配役など広島藩地方の要職に任じられ、維新後は戸長その他をも勤めたのであり、同文庫に

は地方関係の史料がきわめて多数おさめられている。

第二巻は全体を二部に分け、まずこの地方関係文書のうち、支配・村・土地・貢租・戸口・治安・災害救恤・土木・産業・金融・商業・交通・経営・宗教の一四項目を整理し、目録として掲げている。治安の中には訴訟出入にかかわるものが多く、災害救恤では社倉・田租関係がかなりの量を占め、産業には紙・材木のほか銅山に関するもの、扱学座・糠漆・茶・蚕種などの殖産関係、築鮎などの史料をふくんでいる。各項目いずれも興味ある文書があるが、庄巻は経営の諸帳簿であろう。享保から明治まで累年の万覚日記、元禄以降の当座覚日記・万貨覚日記をはじめ、銭小払日記・銀請払日記・金請払日記・米買覚日記・船算用日記・御年貢方覚日記・日備覚日記などがあり、貞享以降の万覚帳も二十数冊ある。

近世の地方史料を整理したことのあるものなら誰でもわかっていることだが、このような仕事はまったく気の遠くなるほど単純なしかも気の抜けない作業の連続で、そ

のわりには一向に人的・物的条件に恵まれないのである。御多分にもれず、この目録の作成も、地方文書に入ってからには難航している様子が小倉豊文氏の序文にも読みとれるが、なんとかがんばって頂いて、第三巻以降の刊行の早く完了することを祈りたい。

目録第二巻の他の一部は典籍である。広島県重要文化財となっている「芸州加計隅屋鉄山絵巻」のほか、代々の当主・一族の編著書・写本、蔵書類がおさめられている。なかには、芸州通志編纂にさいして提出した国郡志村方下調帳がある。加計村組合八カ村・大利原組合二十四か村の割庄屋として作成した全二冊六百枚をこえる写本という。また、二十二代当主が東京帝大英文学科を中退するにさいして、師であった夏目漱石に乞うて作ってもらった目録により、一括して丸善から購入したという英文学古典類がふくまれている。事実とすれば、漱石の研究資料として有益なものといえよう。

なお、部外者による同文庫の利用には、加計家の紹介を必要とする由をつけ加えておく。

(B5判三〇頁 昭和四五年七月刊事 務
取扱 広島大学附属図書館)

(朝尾直弘)

藤井 駿 著

吉備地方史の研究

いにしへの吉備地方、すなわち今の岡山
県全域と広島県東部旧備後国にかけての一
帯は、その位置あたかも畿内と北九州との
中間にあり、前に瀬戸内をひかえて、とく
に交通にもめぐまれていただけに、古来右
の二地域についてもっとも早く開け、爾来
山陽道の中心として、北方山陰の出雲地方
とともに、わが国史の上に独自の地歩を占
めてきた。この地方の歴史の研究には、古
く永山卯三郎のごとき好学の士があつて
「吉備郡史」をはじめ、岡山県金石誌等の
好著を遺されているが、今回そのあとを承
けて、さらに精緻な考証と幅広い視野の下
に立った新しい研究が、岡山大学の藤井駿
教授によってものにされた。

紹介
教授はこの地方の祖神大吉備津彦をまつ
る備中一宮吉備津神社(旧官幣中社)旧社家

の出身として、六高、京大に学び、昭和五
年卒業とともに郷里に帰って母校の教授と
なり、その後身現岡山大学にあつても引き
つづき教授として、通算実に四十年の長き
にわたり終始一貫、地方史の研究に没頭せ
られてきた。その学風は極めて着実で、文
献の中に確証を求めて史実を直叙し疑わし
きはこれを欠くという史学の正道を行くも
の、その対象とするところは古代中世にわ
たる社寺、諸豪族ならびにその莊園を主と
し、かたわら中世の宗教、芸能ならびに近
世学者文人等の伝記に及んでいる。教授は
そのために県下を隅なく歩き、その社寺旧
家を余すところなく訪ねて、新史料の発見
につとめられ、今日までに岡山県古文書集
三巻を水野恭一郎氏とともに編纂、区別せ
られているばかりでなく、別に有名な東寺
領「備中国新見荘史料」をも編集して学界
のために大いに貢献せられたことであつた。

この度の新著はそれら博搜せられた史料
をもとに、その得意とせられる領域に関し、
折にふれて、考証を重ねられてきた大作の
論文都合四十九篇をば、補訂の上、主題別

に編次せられたもの、明年停年退官を予定
せられている教授のためには、まこと好箇
の記念となるべきものであろう。今その中
からとくに目ぼしい諸篇の若干を拾うてそ
の内容を紹介しよう。

本実は全巻を吉備史と吉備津神社、莊園
と中世豪族、中世の宗教と芸能、近世の人
物像と歴史の四部に類別、編次せられてい
るが、まずその第一部にあつては崇神朝に
四道將軍の一人として吉備国に派遣せられ
た大吉備津彦命の後裔と伝える吉備氏一族
のうち、加夜国造家、すなわち後の賀陽氏
をもつてその本宗と考へ、その系譜を考証
しつつ一門消長の跡を考察せられた「加夜
国造の系譜と賀陽氏」がもっとも力篇と認
められる。教授は吉備氏をもつてこの地方
土着の豪族であろうとする一部の人々の説
を排して、これを皇別(彥靈天皇の皇子)大吉
備津彦の後裔とする所伝をすなおに受けい
れ、国造本紀や新撰始目録によれば、駿河
・越前・豊後・肥後等にもその子孫がいる
中で、とくに吉備地方に勢力を有した上道
・三野・下道(以上備前)加夜・笠(以上備中)